

天皇、瀬生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る(二〇)

皇太子の答へましし御歌 明日香宮に天の下知らしめし天皇、
詔して天武天皇といふ

紫草のには入る妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも(二三)

紀に曰はく、天皇七年丁卯、夏五月五日、瀬生野に縱獵したまふ。時に
大皇帝・諸王・内臣と群臣、悉皆に従そといへり。

あしききの山しづくに株待つとわれ立ち濡れぬ山しづくに(二一七)

吾を得つと君が濡れけむあしききの山しづくに成らまほと(二一八)

袖を振る

石見の海 角の浦廻を浦なしと 人こそ見らめ 濁なしと 磯

となし 人こそ見らめ よしゑやし 浦は無くとも よしゑやし

磯は一に云ふ、無くとも 鯨魚取り 海邊を指して 和多津の 荒磯

の上に か青なる 玉藻沖つ濠 朝羽振る 風こそ寄せめ 夕刻

振る 浪こそ來寄せ 浪の共 か寄りかく寄る 玉藻なす 寄り

寝し妹を 一に云ふ、はしき 露霜の 置きてし來れば この道の 八

十隈毎に 萬たび かへりみすれど いや遠に 里は放りぬい

や高に 山も越え來ぬ 夏草の 思ひ衰えて 偲ふらむ 妹が門

見む 靡けこの山

(二三二)

反歌二首

石見のや高角山の木の際よりわが振る袖を妹見つらむか(二三三)

袖を返す

吾妹子に戀ひて爲方なみ白樺の袖返ししは夢に見えきや (二八三)

わが背子が袖反す夜の夢ならしまことも君に逢へりし如し (二八三)

白樺の袖折り返し戀ふればか妹が姿の夢にし見ゆる (二九三七)

いとせめて恋しき時はぬばたまの夜の衣を返してぞ寝る

小野小町

夢にだに見えむとわれほほどけともあひし思はねば諸見えざらむ (四七三)

天飛ぶや 輕の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに見

まく欲しけど 止まらずかは 人目を多み 數多く行かば 人知

りぬべみ 狭根葛 後も逢はむと 大船の 思ひ憑みて 玉かぎ

る 磐垣淵の 隠りのみ 戀ひつつあるに 渡る日の 暮れ行く

が如く 照る月の 雲隠る如 沖つ濠の 靡さし妹は 黄葉の 過

ぎて去にきと 玉梓の 使の言へば 梓弓 聲に聞きて一に云ふ、聲

言はむ術 爲むすべ知らに 聲のみを 聞きてあり得ねば わが

戀ふる 千重の 一重も 感むる 情もありやと 吾妹子が 止ま

す出で見し 輕の市に わが立ち聞けば 玉櫛 畝火の 山に 鳴

く鳥の 聲も聞えず 玉梓の 道行く人も 一人だに 似てし行

かねば すべをなみ 妹が名喚びて 袖を振つる 或る本、各のみ聞

句あり (二二〇七)

井に無歌

柿本朝臣人麿、妻死し後、泣血哀慟して作る歌二首

わが思を人に知るれや玉匣開き明けつと夢にし見ゆる

(四五九一)

劔太刀身に取り副ふと夢に見つ何のしるしをも君に逢はむ爲

(四六〇四)

うち鼻ひ鼻をそひつる劔刀身に副ふ姝し思ひけらしも

(四六三七)

摺衣着りと夢見つ現には誰しの人の言か繁けむ

(四六三二)

同じ坂上郎女の初月の歌一首

月立ちてただ三日月の眉根搔き目長く戀ひし君に逢へるかも

(四六九三)

眉根搔き鼻ひ紐解け待つらむか何時しか見むと思へるわれを

(四七〇八)